

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-29

真紀が急いで身づくろいを整い終えると横田は白ワインを二つのバルーン型ワイングラスに適量を注ぎ、「お疲れ！」と労いの言葉をかけてグラスを掲げてからひと口飲んだ。

「五代目が差し入れしてくれてくれたそうだ。お礼の電話はしておいたが、いらぬ気遣いをさせてしまった。シャブリ・グラン・クリューのレ・クロの2003年を2本」と横田はフランス東部ブルゴーニュ地方特産の白ワインのラベルを見て言い添えると満更でもなさそうな顔を作り、「料理をお願いします」と客室電話で頼んだ。

幾度となく銀座で旬の越前ガニを食したことがある真紀も、『こばせ』と言う特定の宿で食べなかったならば、自分の店のお客との話題に上った時に越前ガニを味わったことがあるとは、決して口にはできなかつただろうと思知らされた。

真紀の味覚は開高健がそのエッセイ集の中で表した美味、妙味、魔味が滴り落ちる真髓で支配された。

男と女は大皿に盛られたカニの洗いや茹でガニをただただひたすらに食べた。言葉など必要なかった。男は2本のシャブリが空になると、客室電話でやり取りして、地酒をルームサービスさせた。

使用済みそのままの二つのワイングラスに黒龍酒造の大吟醸(4合瓶)を注いで、ひと口飲んだ横田は、「五代目には悪いが、地酒のほうがベストマッチングだね」とさりげなく言うと、実証するかのように茹でガニにかぶりついた。

真紀と自分との酒量の許容範囲をわきまえている横田は、最後に大吟醸をもう一本追加注文した。

溢れるほどの豊穡感に満たされた男と女には、セックスの介在する余地はなかった。

真紀は横田の寝息を聞きながら、かつて経験したことのない精神バランスに入り込んでいた。

閉じたまぶたの内側に何の形か分からないおぼろげな蜃気楼が浮かんでいた。富山湾の蜃気楼は有名だが若狭湾でも見られるのだろうか、それも季節外れとして違いなはずの現象が真紀を悩ませている。

真紀は脳内にチェス盤を置くことで、得体の知れない蜃気楼を追いやった。

中学に入ったばかりの頃に、初めて父に勝った棋譜を脳内チェス盤上で動かしていた。